レファレンスコーナー

調査・相談カウンターに寄せられたレファレンスの中から、郷土に関わる事例を紹介します。

Q. 遠野地方にある「ダンノハナ」とは？

柳田国男‖著『遠野物語』の 111 話、112 話、114 話に、次のような記述があるのでご紹介します。

〔111 話〕 **山口、飯豊、附馬牛の字荒川東禅寺及火渡、青笹の字中沢並に土淵村の字土淵に、ともにダンノハナと云ふ地名あり。その近傍に之と相対して必ず蓮台野と云ふ地あり。(以下略)**
註には、ダンノハナは壇の塙なるべし即ち丘の上にて塚を築きたる場所ならん境の神を祭る為の塚なりと信ず(以下略)。

〔112 話〕 **ダンノハナは昔館の有りし時代に囚人を斬りし場所なるべしと云ふ。(以下略)**

〔114 話〕 **山口のダンノハナは今は共同墓地なり。(以下略)**

111 話「蓮台野」は「デンデラノ」で、昔は六十を越えた老人は、すべてこの蓮台野へ追いやる習いだったと伝えられています。いわゆる姥捨て伝説があるこの場所と「ダンノハナ」は、位置的に近いものでした。114 話は、山口の「ダンノハナ」にある「館の主の墓なるべし」と推定された場所について書かれており、そこを掘った者を村の老人たちが大変叱ったという話が語られています。

【参考文献】( ) 内は当館請求記号
『遠野物語』柳田国男‖著　大和書房‖発行　1980 年 (K388/ヤ 2/4)
『注釈遠野物語』遠野常民大学‖編著　筑摩書房‖発行　1997 年 (K382.122／トオ)
『遠野物語辞典』石井正己‖監修 青木俊明‖〔ほか〕編 岩田書院‖発行 2003 年(KR382.122/トオ)

Q. 大森貝塚を発見したモース博士は、岩手県を訪れたことがあるらしいが本当だろうか？

エドワード・S・モースは、明治時代のはじめに東京大学で生物学を教えた「お雇い外国人」の一人です。モース博士の滞在日記『日本その日その日』(原題『Japan Day by Day』) を調べてみると、「函館および東京への帰還」という項目に、津軽海峡で貝類の採集を終えた博士とその一行が、東京へ向かう帰路、岩手県内にも立ち寄った記述がありました。

現在の二戸市福岡地区について、「**福岡という村は広い主要街の中央に小さな庭園がいくつも並び、そして町が清掃してあってきわめて美しかったことを覚えている。この地方の人々は、目が淡褐色で、南方の人々よりもいい顔をしている**」と、当時の町の様子が記されています。

また、盛岡を訪れた際は、「**われわれは盛岡には、ほんの数時間留まり、果実と菓子とを買いこんで、正午北上川を一二五マイル下って仙台へ出る、舟旅にのぼった**」「**河上の景色は美しかった。一日中南部富士が見えた**」との記述があります。このほか、幾つもの村々を通過して相撲を見物し、宿泊地で兵士の一隊に出逢い、岩手県内で体験した日常を、『日本その日その日』のなかに、こまやかに書き留めています。

【参考文献】( ) 内は当館請求記号
『日本その日その日　第 2 巻』
E・S・モース‖著　石川 欣一‖訳　平凡社‖発行 1978 年 (B/291.099/モ 1/3-2)
『エドワード・シルベスター・モース<上><下>』
D・G・ウェイマン‖著　蜷川 親正‖訳　中央公論美術出版‖発行　1976 年 (289.3/モ 5/1)
『お雇い外国人　第３巻』上野 益三‖著　鹿島出版会‖発行　1979 年(210.6/オ 6/3)